
桜花

小林 晶子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

桜花

【Nコード】

N2897E

【作者名】

小林 晶子

【あらすじ】

進路に行きづまって帰ってきた故郷。あんなに嫌っていたこの町で出会った少女は…。

第一話

僕が十八まで住んでいた町は、山と川と畑ばかりの小さくて寂れたところだった。田舎特有の人間関係も地域性の高さも、僕には鬱陶しいばかりで、体面だけを取り繕うことを覚えると尚のことだった。

高校卒業後、逃げるように県外の大学に進学した僕は、盆や正月になっても何だかんだと理由をつけて帰省を避けていた。両親も何となく察しているのだろうが、何も言わないところを見ると、向こうもそんな息子とは顔を合わせ辛いのだろう。

まっすぐ家には帰らないで辺りをうろろろしていると、いつの間にか神社の境内に来ていた。

古ぼけた社に草の登った鳥居。三年も経つというのに、この町はどこも変わっていない。それが余計に自分を拒んでいるように思えて居心地が悪かった。

「あなたも桜、見に来たの？」

「…桜：？」

自分の他に誰かいたことに驚くよりも、違和感を覚えたその言葉を反芻していた。

「桜なんて」

暦の上では春といっても三月中旬で、まだ寒い日が続いている。

梅ならともかく桜が咲いているわけがない。

「ここの桜は早咲きだから。今はまだだけど、すぐ満開になるよ。ほら、つぼみ見えない？」

（そうだった？）

三年前の今頃は、花なんて咲いていただろうか。

花どころかわずかな緑さえ芽吹いていないように見える大木を仰いだ僕は、そのとき初めて声の主の方を振り返った。

健康的な白い肌は、年頃の女の子にしては化粧っ気がない。少し

傷んだ茶髪を首の位置で揃えて、トレーナーにジーンパンというラフな格好をしている。

「見かけない顔だけど。…この辺の人だよな」

「……」

「東京？」

「……」

「…喋れないわけじゃないよね？」

覗き込むようにして僕の顔を見ていた彼女は、思いつきり僕の頬を引っ張った。

「そんなわけないだろ」

僕は顔をしかめて、その手を払いのけた。初対面で馴れ馴れしすぎるとは思わないのだろうか。

「そうだね、ごめん」

彼女は意外にも、あっさりと謝った。

「つい、いつもの癖で」

…この感じは駄目だ。

初対面のはずなのに、何故か苛立つ。彼女は僕にないものを持っている。僕が嫌悪して、意識的に避け続けていたものを持っている。そんな気がした。

僕は彼女に背を向けて、短い階段を下りた。

「あ。ねえ、名前」

関係ない。

「なんていう名前なの？」

煩い。

「名前、ないの？」

「そんなわけないだろ」

どうして放っておいてくれないんだろう。どうして他人のことを知りたいと思うんだろう。理解できない。

「言いたくないんだ。じゃあヒロユキって呼ぶよ」

「？」

「私が最初に付き合った人の名前」
最低な気分だ。

自分とは決して相容れない存在。
もうそれ以上そこには居たくなくて、僕は早足で神社をあとにした。

いつもならあんな言い方はしない。もつと賢くかわすことができたのに、久しぶりに帰ってきたせいで調子が狂っているのかもしれない。

そうだ。あの感じ、覚えがあると思ったら、この町の雰囲気そのままなんだ。誰のことも他人とは思わない、みんなが家族みたいな空気。僕はそういうのが嫌で、この町を出て行っただ。

「あ、兄ちゃん」

家の前の道端で遊んでいた弟が、目敏く僕を見つけて駆け寄って来た。僕とは正反対で、人懐っこい性格をしている。歳の離れた弟を可愛く思わないわけではないが、弟が生まれてから余計に家に居辛くなったのも事実だった。

「お母さん！」

そう叫んで、僕の手をひいて家へ入る。

「どうしたの、貴志。そんな大声出して」

貴志の声を聞きつけて玄関先に出てきた母親は、僕の顔を見て目を丸くした。

「…おかえりなさい」

「ただいま」

「帰ってくるなら電話くらいしてくれば良かったのに…」

僕がいきなり帰ってきて困っているのが、手に取るように分かる。予想通りの反応に、かえっていつものペースが戻ってきたらしい。

僕は笑顔さえ浮かべて、母親の横を通り過ぎた。

「ねえ兄ちゃん、いつまでこっちにいられるの？」

「いつまでって」

そう長居するつもりはないが、特に急ぐ用事を残してきたわけでもない。卒業後の進路のことをぼんやりと考えていて、気がついたら帰省していたのだ。

そんなつもりはなかったのに。

「お祭りがあるの、知ってるでしょ」

「ああ、毎年神社でやってるやつだろ」

「一緒に行こうよ」

とんでもない。あんな知り合いばかりの祭りに行くなんて、冗談じゃない。

「暇だったらな」

「僕、みんなに兄ちゃんのこと自慢するんだ」

すっかりその気になっっている貴志には悪いが、何か理由をつけて早めに帰ったほうが良さそうだ。

きれいに片付いたまま三年前と変わらない自分の部屋に鞆を置くと、母親に言われて何故か貴志の絵の宿題を手伝ってやることになった。僕が貴志に構っていれば、親も少しは安心できるというわけだ。

茶の間の机に広げられた四つ切りの画用紙を覗き込むと、貴志は緑の水彩絵の具でべったりと森を塗り潰しているところだった。

「……？」

見れば森の他には川と空しかない。まるで。

「写生？」

まるでこの町みたいだ。それにしても短絡化しすぎているが。

「うん。昨日あの神社で下書きしてきたんだ」

神社といえは妙なことを思い出してしまった。あの子は何だったんだろう。少なくともここで生まれ育ったわけではないことは確かだ。雰囲気はこの町に馴染んでいたが、きっと都会育ちだろう。こんな辺鄙なところでは珍しいことだ。

「あーあ、失敗。何で上手くいかないのかな」

「どこが失敗なんだ？」

確かにお世辞にもきれいとは言えないが、小学生の絵なんてこんなものだろう。木に影があるだけでも上出来と言える。貴志は口をへの字に曲げて、画用紙をびりびりと破いた。

「これじゃ駄目なの」

そう言ってさっさと絵の具を片付けてしまった。

次の日、僕は写生の下書きをやり直すという貴志に連れられて、もう一度あの神社に行った。今度はそこで色も塗ってしまうつもりなのか、絵の具も持ってきている。

僕は隣で大まかな間違っただけ指摘していたが、塗る段階になると貴志は少し手をつけるだけで、あとは全部僕が塗るはめになった。

「すごい。兄ちゃんってやっぱり何でも出来るんだ」

美術の成績は悪くなかったが、絵を描くのが特別好きだったというわけでもない。得意なものがあつたわけでもない。ただ人並みに劣っているものがないだけで、周りが勝手に何でも出来ると思っただけだ。すくも何ともない。努力したからそうだっただけだ。

「貴志、でもこれ」

「あーっ、おねえちゃん」

僕の言葉を遮って、貴志が神社の境内を駆け下りていく。

「……？」

嫌な予感がして恐々と見下ろすと、案の定、そこには昨日のあの女の子がこちらを見上げて立っていた。貴志が絵を見せて僕の方を指差す。目が合うと驚いたような顔をしたが、すぐに貴志と共に階段を上って近づいてきた。

「こんにちは」

「はじめまして」

貴志がいるてまえ、昨日のような態度を取ることもできず、仕方なく笑顔をつくって挨拶をする。言葉が不自然なのに気付いて彼女は少し首を傾げたが、何も言わずに受け流してくれた。

「貴志くんのお兄さんなの？ かつこいいね」

「うん！」

「お兄さん、何ていう名前なの？」

意地悪っぽく僕のほうを横目で見ながら、貴志に尋ねる。

「佐藤裕幸」

「…ひろゆき！？」

啞然として、それから笑いを堪えるようにその場に蹲った。あんなことを言われた後だから、これだけは絶対に知られたくないと思っていたのに。

「貴志、もうすぐ日が暮れるから先に家に帰ってろ。母さんが心配する」

言って先に帰らせると、まだ肩を震わせている彼女を軽く睨みつける。貴志が見えなくなると、今度は大声で笑いはじめた。

「ほんとにひろゆきだったんだ」

笑いすぎて、目の端に涙を浮かべてすらいる。

「しかも貴志くんちのお兄ちゃんだったとはねー。ほんと、噂通り。成績優秀でスポーツ万能で、人当たりが良くて頼りになって、おまけに誰にでも優しい」

「…そんな人間がこの世にいるわけないだろ」

「みたいね」

笑いが一段落ついたのか、指で目の端を拭くと、階段に直に腰を下ろした。

「私の名前、訊かないんだ」

「だから？」

何か変なものでも見るような目で僕を見上げる。

「変でしょ。あなた、私のことなんて呼ぶつもりなの？」

また会う機会があるとは限らない。いや、むしろもう会いたくな

い。

僕は少し考えて、適当にかわして帰るまで会わないように気をつければいいという結論に至った。

「ナオコ」

「…最初の彼女の名前？」

「母親」

あの人がそんな名前だったなんて、今まで気付かなかった。十代で僕を産んだという母親は、二十歳の息子がいるとは思えないくらい若く見える。

「お母さん好きなの？」

「まさか」

今さら彼女に優等生ぶっても仕方がない。

「他に思いつかなかったから」

「付き合ってた女の名前なんて覚えてないって感じだもんね。あんまり女の子…ってゆうか他人に興味がないんだ」

そう言われてみればそうかもしれない。勉強して大学に行って、この町を出ることしか考えていなかったような気がする。

「でも私にはちゃんと中野千晴って名前がある」

「…ふーん」

ナカノチハル。やっぱり聞いたことない名前だ。

千晴は日の沈みかけた町を見下ろして、目を細めた。

「良いとこだよね、ここ」

「……」

「町の人みんな優しいし、自然もいっぱいだし。お祖母ちゃんと二人暮しなのに、なんか一度に家族ができたみたいでさ。私ずっとこういうのに慣れてたんだ」

「……」

「…何で嫌いなふりするの」

千晴は立ち上がって、僕をじっと見据えた。こういう真っ直ぐな人間は苦手だ。…自分がそうでないからだろうか。

「さっきはそんなじゃなかったのに」

「さっき？」

「絵、描いてるとき。そんな顔してなかった」

見られていたなんて気付かなかった。僕は千晴と目を合わせないようにして一段低いところに降りた。

「ここが良いとこだって言ったよな」

「？言っただけ」

そんなふうに思ったことは一度だってない。

「君にとってはもの珍しくて良い所かもしれないけど、僕は……」
きつと誰にも分からない。分かってもらう必要なんかない。

第二話

『どうして私だけ!?!』

誰だろう。

『私だってやりたいことがあるのに、どうして家に縛られなきゃいけないの!』

ああ、これは母さんだ。僕がまだずっと子供だったころ、よくそう言っただけで泣いていた。かわいそうなひと。

『まだこんなに若いのに、どうして…。子育てで一生終わるなんて嫌よ!』

(じゃあどうして僕を産んだ?)

僕がちゃんとしていれば、僕が母さんを困らせたりしなければ、母さんだって好きなことができる。そう思っていたのに。

『おまえは将来、この家を継ぐんだ!』

(なぜ?)

だってそれは父さんの仕事じゃないか。父さんのやりたいことを、どうして僕がしなきゃいけないんだ。

(僕にはもつと、やりたいことが…)

『成績優秀でスポーツ万能で、人当たりがよくて頼りになって!』

当たり前だ。そうなるように努力したんだから。そんなふうに自分をつくってきたんだから。

『兄ちゃんってやつぱり何でも出来るんだ!』

でも本当は、何も出来ない。

『おまけに誰にでも優しい!』

嘘だ。僕はこんな町、嫌いだった。鬱陶しい人間も嫌いだった。家に固執する父親も泣いてばかりの弱い母親も大嫌いだった。

『…何で嫌いなふりするの!』

嫌いだから、逃げ出したんだ。

「裕幸、もう寝てるの？」

母親の声が僕を呼んだのは、時計の針はまだ十時を少し回ったくらいで、特にやることもなかったから横になってはいたが眠ってはいなかった。自分の家にいるのに何故か落ち着かないところは、三年前と少しも変わっていない。

「起きてるよ」

僕は起き上がったてそう答える。僕は昔から勝手に部屋に入っても怒ったりしなかったが、いつからか向こうの方がそれを避けるようになっていた。それが今日は珍しく、母親は中の様子を窺うように部屋のドアを開けた。

「何？」

「裕幸、何か困ってることがあるの？」

「？」

何の話をしているんだろう。よく理解できないで、僕は首を傾げた。

「だって、急に帰ってくるから、何かあったんじゃないかって」

（ああ、そういうことか）

普通は自分の息子が家に帰ってきたからって、どうして帰ってきたんだとか訊かないだろう。どうしようもなく笑える親子だ、僕達には。

「別に、何もないよ」

「本当に？」

「大丈夫だって。母さんが心配するようなことは何もないんだからいつものようにそう言っと、母親は何故かしゅんとなってしまった。

「そうよね。裕幸は母さんなんかいなかったって大丈夫だもんね」

今度は何を言い出すのかと思ったら、何を突然。

「裕幸は昔から勉強も運動もできて、ご近所であなただのこと褒めら

れるのがすごく嬉しかった。でも母さん、裕幸に何にもしてあげないよね。だから裕幸に嫌われても仕方ないって思ってたの」

「…そんなことないよ」

「分かるわよ。だってあなたの親だもの」

僕は急に腹が立ってきた。今更、母親みたいな顔をされても困る。僕なんか産まなければ良かったって思ってるくせに。

「僕は」

だから僕は一人で何だってできるようにならなきゃいけなかった。いつだって母さんを自由にしてあげられるように、誰にも頼らないように。

「本当に大丈夫だから…」

完璧な人間になりたかった。そうすれば誰にも何も言われない。干渉されない。

「…そう」

部屋を出て行く母親の背中を見送りながら、僕はふと千晴のことを思い出していた。

その日は朝から雨で、別にもすることもなく部屋でぼんやりしていた僕は、水溜りの水をはねる音に気を取られて、何気なく窓の外を見やった。家の前を誰かが横切っていく。ただそれだけのことが妙に目を引いたのは、彼女が傘も差さずにふらふらと歩いていたからだった。

（何やってんだ、あいつ）

知り合いでないなら呆れるだけでやり過ごしただろうが、放っておくわけにもいかない。もし肺炎でも起こされたら、後味が悪いし。……」

声をかけようとしたが、急にいつもと違う雰囲気を感じて、我に返ったとき、僕は千晴の姿を見送ってしまっていた。

（神社か？）

方向がそうだったし、それに千晴の行きそうなところなんて、僕にはそれくらいしか思い浮かばない。僕はどうしようか迷ったが、結局、神社に行ってみることにした。

家からはそう遠くないのだが、山の中だけに曲がり道やら坂道やらが多い。いつ見ても古いだけで胡散臭いこの神社のあの桜の大木の下に、千晴は俯いて座っていた。僕の姿を認めて笑ったのが、あまりにもいつも通りで、僕はどうしてもいいかわからなかった。

「馬鹿かおまえは。傘ぐらい差して歩けないのか」

一応、千晴が濡れないくらいの位置まで近づく。彼女は、それには答えなかった。

「やっぱり桜、見に来たんだ」

「…こんな雨で、咲くわけない」

僕の中で、また苛立ちが頭を擡げてくる。それは以前と違った、理屈では説明できないもつと根本的なものだった。

「何かあったのか」

「でも明日か明後日くらいには咲きそうなんだよ？」

「そんなこと訊いてるんじゃない」

「……」

「……」

これじゃ、最初に会ったときと立場が逆だ。僕は諦めて向こうが口を開くのを待つことにした。

「ほんとに何でもないことだよ。…親が離婚するだけ」

（親？）

確かお祖母さんと二人暮しだと聞いていたはずなのに。

察したのか、千晴はまた笑って、言った。

「どっちも本当。両親はいるけど、私は二年前からお祖母ちゃんと二人暮し。でもそのお祖母ちゃんも、この前ぽっくり逝っちゃった」
どうして二人暮しをすることになったのかは、聞かなくても何となく察しがつく。

「もう一人でも大丈夫なのに、親はそうじゃないみたい。どっちが私を引き取るかで裁判までして。…笑っちゃうよね。親が子供を譲り合うなんて」

譲り合う。

それは、つまり。

「いらぬならいらぬって、はっきり言ってくればいいのに」
「……」

「ハハ…冗談じゃないよね。いつもいつも子供だからって親に振り回されて。産んでやったから育ててやったからって、それが何？こんなときでも千晴はやっぱり笑っていた。その表情から悲しいという感情を読み取ることはできない。

「私なんて生まれてこなければ良かったって思ってるくせに…」

『僕なんか産まなければ良かったと思ってるくせに』

僕はまるで何か変なものでも見るような目で、彼女を見つめていた。どうして、僕と同じことを言うんだろう。僕と彼女は全然、正反対の人間だったはずなのに。

「…私、お父さんのこともお母さんのことも好きだった」

ぼつりと千晴がそう零した。

「良い子でいれば私のこと好きになってくれるって思ったのに、良い子だから放つたらかし。今度は髪染めたり学校サボったりしても叱りもしない。…だから諦めた。もう期待しないように、嫌いになろうって」

『一人で何だってできるように』。

『完璧な人間に』。

ずっと、そう思っていた。

「でもこの町にいれば、ずっと欲しかったものがこんなに簡単に手に入るんだよ。ここには私の居場所がある。ここにいればもうあんな思いしなくてすむ」

立ち上がった千晴は服が汚れるのも気にしないで、木の幹に寄り掛かる。

「明日、咲けばいいんだけど」
僕にはその言葉の真意が分からなかった。

第三話

『お父さんのこともお母さんのことも好きだった』。

家に帰った後も、千晴の言葉が耳について離れなかった。

そうだ。僕も昔はそんな気持ちを持っていたような気がする。父親に認めてもらいたくて、母親に好かれたくて、ただそれだけのために努力して、今の自分をつくってきたのだ。どんなに頑張っても僕は親にとっての子供でしかないのに。

僕が何でもできるようになればなるほど、親は僕の実存を持て余すようになった。そして僕自身も。

「兄ちゃん」

我に返った僕は、いつの間にか貴志が部屋に入ってきていたことに気付いた。

「ご飯だつて」

「あ、ああ。今行く」

他人のことなんか分からない。僕だつて僕が何なのか分からないでいるんだから。何ができるのか何をしたいのか、そもそも自分が居るべき場所さえも。

「あ、兄ちゃん」

一足先に階段を下りていた貴志が、急に思い出したようにぐるりと振り返る。

「明後日のお祭り、一緒に行けるよね」

「祭り？」

そういえば祭りのことなんかすっかり忘れていた。

「どうかな。雨が止まなかつたら祭りはできないから」

僕にとっては、その方が都合なのだが。

「えーッ、そんなのやだー」

「やだつて言われても」

僕にはどうしようもない。貴志の大声が台所の母親にも聞こえた

のか、皿を並べながら軽く貴志を叱った。

「わがまま言わないの。お兄ちゃん、困ってるでしょ。それにお祭りなら来年もあるでしょう」

「だって兄ちゃん、あんまり帰って来ないんだもん」

何気に痛いところを突かれたような気がする。子供だから他意はないのだろうが、両親の前で、こうもはっきりと指摘されるとは思っていなかった。

何となく居心地の悪さを感じながら椅子に座った僕に、それまで新聞で顔を隠すようにしていた父親が珍しく口を開いた。

「…東京はどうだ」

三文ホームドラマかとツッコミたくなるような言葉に、僕は思わず吹き出しそうになる。寸でのところで笑いは避けたが、それでもいつもとは違う笑顔になってしまった。

「いいところだよ。便利だし」

「…大学は？」

「ちゃんと勉強してるよ」

「そうか。…卒業したらどうするんだ」

「僕は…」

卒業したら。

そう明確に示されて、僕は言葉に詰まった。

自分にはもつとやりたいことがある。漠然と、そう思っていた。でも家を出て、町を出てもその答えは見つからなかった。

ただ、ここから逃げ出したい。

それを目的にしていた僕には、その先のことなど具体的に考えられるはずもなかったのだ。

「まだ、決めてない」

口からでまかせを言うわけにもいかず、正直に言う。

「こっちに帰ってくるかも、分からないし…」

「ええー！！」

貴志が驚いたように叫んだ。

「そうか。まあ、おまえはしっかりしてるからな。自分がやりたいと思うことをしなさい」

いつものようにどうせ家がどうの会社がどうのという話になるだろうと思っていた僕は、思いがけない台詞に面食らってしまった。

父さんはそれ以上なにも言わなかったが、母さんのように僕がどうして帰ってきたのかと思っているだろう。一緒に暮らしている頃は、父の跡を継ぐと名言したことはなかったが、表立ってそれを否定することや反発することはしなかった。僕には、それがよけいな煩わしさを生むように思えたから曖昧にしていたのだ。父親に認めてもらいたい、母親に嫌われたくない、そんな気持ちで中途半端な今の状況を生んでいるのだろうか。

やりたいことをしなさいと言った父の言葉に抵抗はなかった。しっかりしているから、という両親の言葉は、放任なのではなく信頼してくれているのだと今は素直に受け取ることができた。

次の日は、昨日までの雨が嘘のように晴天だった。貴志はすっかり僕と祭りに行く気であるが、地面が乾いてないせいか、神社に祭りの準備をしている様子はない。ついて行くと言って聞かなかった貴志を、何とか説得して来たが、境内にも桜の下にも彼女はいなかった。別に会う約束をしていたわけではなかったが、昨日聞いたあの言葉が気になって、ここに来ずにはいらなかったのだ。変な話だが、ここまで来ていながら僕は、千晴がもうここには来ないような気がしていた。

桜の枝先のつぼみは、もう自然に目につくくらいになっている。

千晴は明日と言っていたが、今日中には無理だろう。

いいかげんバカバカしくなって帰ろうと踵を返した僕は、境内に立ってこっちを見ている彼女を見つけた。

「なんだ。やっぱり桜、見に来てたんじゃない」

「…別に」

「じゃあ、見送りに来てくれたの？」

「…？」

僕には何のことだか分からなかった。

「言っただしょ。私、どっちかの娘になるんだって」

見れば、服はいつもとあまり変わらないが、荷物の一部らしい大きな鞆が鳥居の側に転がっている。

「花、やっぱり咲かなかったね」

千晴は湿った木の肌に手を当てて、笑った。

「残念。今日咲いてたら、東京まで持っていこうと思ってたのに。やっぱりこの木はここにあるのがいちばんなんだよね。…私も」

こんなときになっても、千晴の笑顔には曇りがない。僕にはそれが余計に腹立たしいことのように思えた。

千晴は名残惜しそうに木から手を離すと、自分の鞆を持ち上げる。

「……」

「私、絶対ここに帰ってくるって決めたから、花はその時までおあずけ。もう一回、この桜見るまで頑張ってみる」

「…そうか」

引き止めようとは思わなかった。そうする理由も見つからなかったし、そんな必要もなかった。

「…ねえ」

僕に背中を向けて、思い出したように尋ねる。

「どうして今日、ここに来たの？」

「…風邪、ひいてないかと思ったから」

嘘でもない。あれだけずぶ濡れになっていれば、風邪の心配をして当然だ。

「でも損した。ナントカは風邪ひかないっていうし」

「何それ、最悪。…もっと気の利いたこと言えないの？」

「頑張れよ」

「…裕幸もね」

それだけ言うと、千晴は古くて薄汚れた階段を降りていく。
今、この瞬間にも咲くかもしれない桜を、振り返りもしなかった。

「兄ちゃん」

逸れないように手を繋いで歩いていた貴志が、人雑の中で僕を呼んだ。

思い出した。三年前もこうやって貴志と一緒に祭りに来ていたような気がする。季節外れの桜を見上げていたような気がする。

「やっぱり僕、あの絵、持っていけない」

あの絵というのが、半分以上を僕が手伝ったあの写生の絵だということとはすぐに分かった。そして僕も、同じことを貴志に言うつもりでいた。

「僕、兄ちゃんの弟だから、兄ちゃんみたいに何でもできるようになるんだって。僕は兄ちゃんと違ってお父さんやお母さんに怒られてばかりだし、兄ちゃんみたいになつたら、みんな喜んでくれると思って…」

貴志がそんなふうに思っていたなんて、知らなかった。ずっと弟は僕より恵まれていて、少なくともあの家にとって自分より意味のある存在なんだと思っていた。

自分は自分だと思っただけ、他人はそうは思ってくれない。僕の弟というだけで、無条件に何もかも比較される。それが貴志にとっては辛いことだったのだ。

「でもやっぱり、そういうの嫌だから、自分で描くよ。…ごめんなさい」

「謝ることないさ。自分でやらなきゃ上手くならないから」

「うん」

貴志は満面の笑顔で頷いた。

僕はふと彼女を思い出して、ずらりと並んだ屋台の向こう側を仰

ぎ見る。少し早い桜が、花火にも劣らないくらいきれいな花を咲かせていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2897e/>

桜花

2010年10月8日15時31分発行